



昨年11月下旬のある日、一本の電話が入った。電話は昨年4月に着任されたばかりの福島県北海道事務所の主査でいらっしやるOさんからであった。東日本大震災が起きた2011年から今年まで、毎年寄附をしてきたことに対する感謝の気持ちを伝えたいとのことであった。

2011年3月11日に発生した東日本大震災で被災された際に岩手県、宮城県、福島県の3県に対して、日本赤十字社を通してお見舞い金をお送りした。

## 津波と原発の被災地 福島から届けられた感謝状

情報広報部

橋本 洋一

その後、親を失った震災孤児が3県で2000人を超え、その約1割に相当する200人あまりの震災孤児が両親を失った事実を知って、愕然とした。

私自身が大学院の学生であった時に母をがんで失い、恥ずかしいことだが、心が乱れ、大学院生を続けていく気持ちが萎えてしまい、不甲斐ない日々を送っていたことを思い出した。震災孤児の大多数は大学院生の私と違い、精神面でも財政面でもまだまだ親を必要とする小学生が大多数で、彼らの心の痛みの深さ

は、私の想定をはるかに超えるものであったことは確かだ。

かけがえのない両親を失った震災孤児に何かできることはないかと考えた末に、小学生が大学を卒業するまで10年以上の修学期間と1000万円を超える費用がかかることは間違いなく、3県の両親を失った震災孤児ひとりひとりに、毎年、直接に修学資金を贈ることを決定した。病院の収支決算で赤字にならないという前提条件付きではあったが。

今年3月11日で震災後丸6年の歳月が流れた。寄附金を贈るのも今回で7回目を数えた。このささやかな寄附行為に対して感謝状を戴くことは大変僣越なことであると同時に光栄なことでもあった。

1995年に起きた阪神大震災に比して、復興のテンポが遅いとの指摘がよくなされた。特に福島県は同時に被災した岩手県、宮城県や阪神地区とも異なり、原子力発電所の崩壊に伴う放射能汚染が復興の大きなハンディキャップとして立ち塞がった。全避難地区に指定された数多くの町は無人地区となり、町の存亡の危機に見舞われた。避難された方々の中には心ない風評被害や偏見により傷つかれた方々も少なくなかっただろう。

福島県北海道事務所の主査のOさんが昨年

12月14日、福島県知事の代理人として、感謝状を届けるために来院された。福島県の現況について説明をされている中で、話が風評被害や偏見そして避難先の子どもたちへのいじめ等に及んだ時にOさんの声が突然、涙声になり、その涙声につられて、私も涙眼になったが、気づかれないように必死にこらえた。

《大災害に見舞われたにもかかわらず、暴動を起こすこともなく、整然と列をつくって並んでいた、秩序正しい日本人》と外国のメディアから、人としてかくあるべき模範的な存在として、お褒めの言葉を頂いたが、一方でこういった心ない人々がいることに怒りを通り越して寂しい気持ちにさせられるのは私ばかりではあるまい。ナシヨナリズムに走る気は毛頭ないが、同じ日本人なのにとの思いがこみ上げてくる。

Oさんから贈られた感謝状には『貴院は東日本大震災により保護者を亡くされた子どもたちや被災した子どもたちの支援のため多額の寄附を提供されました。よってここにその御厚情に対して深く感謝の意を表します』と書かれていた。

数年前に厚生労働大臣から戴いた感謝状が置かれた院長室のある場所に、この《小さな感謝状》が、取って代わって置かれた。この《小さな感謝状》は『これからも被災地を忘れないでね』とのメッセージを発信しつづけてね、今後のわれわれの生きる日々を見守り続けてくれるに違いない。